彙報

○史學研究會

例會　四月二十日(土)午後一時より樂友會館に於て開催、左の講演があつた。午後五時閉會。

一、上代日本の甲冑　　末永　雅雄氏

我國上代甲冑の名稱、源流より、甲冑個々の說明あり最後に後代甲冑への推移と影響、式正鎧の成立を述べられた。尙挂甲系短甲系甲冑の寫眞を配布して說明せらるる處があつた。

一、唐鈔本唐令の一遺文　　那波　利貞氏

本誌論文參照。

○西洋史讀書會

菅原憲氏送別會　久しく三高敎授にして又吾讀書會の大先輩たる菅原憲氏が今回臺北帝國大學に御榮轉になられるに當り三月十六日桃園亭に於て送別會を催し菅原氏を始め時野谷、原、那波諸先生以下十八名出席し、一夕氏の御榮轉を祝し御健康を祈りつゝ盡きぬ名殘ををしんだ。

例會　村田、井上兩講師並に二回生諸君の歡迎會を兼ね五月二日午後六時半より樂友會館に於て開催、一同食堂に於て晩餐を共にしたる後別室に於て左の讀書紹介、研究發表を聞き十時散會。出席者時野谷、原兩敎授、鈴木、村田、井上三講師を始め二十九名。

一、Deutsche Vierteljahrsschrift (Bd. V. 1927)の中より　　文學士　武藤　醇吉氏

一、Beaumarchais の事など　　文學士　前川貞次郎氏

○東洋史談話會

東洋史懇親會　五月四日、四條河原町くずや、參會者那波助敎授外十七名。

第四十五回例會　五月二十一日(火)樂友會館一號室、參會者二十四名。

一、北宋時代の茶法　　佐伯　富氏

北宋初期の茶法變遷崩壞の跡を軍費との聯關に於て

當代商業上に於ける豪商の影響を考察しつつ述ぶ。

一、後漢書酷吏傳に就いて　宇都宮清吉氏

酷吏傳中に見ゆる大姓豪姓等の名辭の社會經濟上に於ける位置を考察し、地方に反官的勢力を張つた彼等と官僚との闘爭に關し述べ後漢書に云ふ酷吏の性質を考察した。

○支那學會

歡迎會　四月二十七日於學生集會所

大會　五月二十二日、於樂友會館

一、義の概念の展開　西田長左衛門氏

一、東方に於けるソグド人の活動　羽田亨氏

一、岑嘉州の詩　鈴木虎雄氏

座談會　（狩野博士を中心として）　五月二十八日、於樂友會館

○地理學談話會

五月例會　五月四日午後一時より陳列館地理學實習室に於て開會、參會者二十七名、左記の研究發表があつた。

一、植民發向の型に就いて　田中秀作氏

移植民活動の本國から他地方へ發展する方向を自然的には本國の位置、環境、人文的には民族性、順應性、人口的壓迫、發展地の摩擦、抵抗等を考慮して次の如き分類を試みた。一、フエニシヤ・ギリシヤ型　二、ローマ型　三、モンゴール・タタール型　四、ゲルマニヤ型　五、イギリス型　六、ニッポン型

二、リッターの功績　野間三郎君

リッターの功績としては一、大學に初めて地理學の講座を設けたこと、二、批判的資料を基礎して地誌を編んだこと、三、從來無批判的に踏襲されてゐた地誌を脱して、地表を構成する諸要素が有機的な關聯に於て形成してゐる個體としての地域を認識するに努力したこと等が擧げられる。

三、先史時代に於ける採鑛冶金（第一報）　近藤忠氏

世界に於ける銅器文化の推定開始年代の地方的相違と東亜に於ける銅器文化の發生地並びに其の發展進向

の徑路の大略をば現在の銅鑛の所在と比較考察をなし次に銅の採鑛技術に先驅するものとして、歐洲に於ける新石器時代の燧石の採鑛技術の發展を簡單に述べた

○京都帝國大學文學部史學科

本學年講義題目

國　史　　毎週

普通　西田教授　國史概說(第一部)　二
　　中村助教授　國史概說(第二部)　二
特殊　西田教授　日本近世文化と神道思想　二
　　牧教授　日本法制史　二
　　喜田講師　古代史の特殊問題　(一五)
　　藤講師　中世前期の社會　二
　　黑板講師　日本古文書樣式の研究　(二〇)
　　牧野講師　中世後期の經濟生活　(三〇)
　　藤井講師　明治維新史　(三〇)
演習　西田教授　現時に於ける國史の諸問題　二

東洋史

普通　羽田教授　東洋史概說(第一部)　二
　　那波助教授　東洋史概說(第二部)　二
特殊　羽田教授　中央亞細亞の文化　二
　　那波助教授　唐代の庶民生活　二
　　宮崎助教授　宋代の役法　二
　　梅原助教授　東亞考古學(金屬時代以後)　二
　　鷲淵講師　清朝興起史　(四〇)
　　和田講師　明代制度史　(三〇)
演習　羽田教授　東洋史の諸問題　二

西洋史

普通　原教授　西洋史概說(第一部)　二
　　時野谷教授　西洋史概說(第二部)　二
特殊　時野谷教授　第十八世紀の英國　二
　　原教授　復興期の精神　一
　　鈴木講師　中世精神史　二
　　村田講師　希臘文化の黎明　二
　　井上講師　羅馬共和政時代の社會的經濟的發展　二
　　濱田教授　歐洲考古學(羅馬・希臘時代)　二

演習　時野谷教授　Oakes & Mowat: The Great European Treaties of the 19th Century　一

原　教授　ギリシヤ精神の傳承　二

史學研究法

普通　原(隨)教授　史學研究法　一

地理學

普通　石橋教授　人文地理學概說(第一部)　二

小牧助教授　同　上　(第二部)　二

中村(新)教授　自然地理學概說　二

特殊　石橋教授　水上交通地理　二

小牧助教授　地誌學の諸問題　二

小野講師　地圖學　二

春本講師　地形學　一

演習　石橋教授／小牧助教授　内外地誌演習　二

實習　石橋教授　地理學實習　二

考古學

普通　濱田教授　考古學概說　二

特殊　濱田教授　歐洲考古學(羅馬希臘時代)　二

梅原助教授　東亞考古學(金屬時代以後)　二

村田講師　希臘文化の黎明　二

演習　濱田教授　考古學演習　二

實習　梅原助教授　考古學實習　二

副科目

中村助教授　日本古文書學(社寺文書の研究)　一

藤　講師　史料講讀(公家法制史料)　一

宮地講師　日本神祇史　(二〇)

出雲路講師　神道有職故實　二

羽田教授　史籍講讀　一

那波助教授　同　一

宮崎助教授　支那地理書講讀　一

時野谷教授　Ranke: Ueber die Epochen der neueren Geschichte　一

小牧助教授　(a) Otto Maue: Geographie der Kulturlandschaft　一

濱田教授　(b) Ph. Arbos: L'Auvergne　一
清野教授　考古學洋書講讀　二
源講師　人類學概說(第一、二學期)　二
望月講師　藤原時代の美術(哲學科講義)　二
日蓮宗史(哲學科講義)　二

○京都帝國大學國史學科春期見學旅行記

國史科春期見學旅行は五月十八、十九兩日に亙り岐阜、飛驒白川鄕方面に行はれた。名のみ聞く白川の異風俗が人々の興味をそそり、參加者多數、特に學生よりも卒業生の多いことも今迄に見ぬ情景である。

十八日　午前六時三十三分、折りからの細雨の中を西田教授藤講師以下一行三十餘名は京都驛を出發した。同九時四十七分岐阜驛着、岐阜高女に勤めてゐられる先輩小泉精一氏、縣囑託の伊藤信氏等に迎へられて自動車に分乘し、先づ長良川の畔なる崇福寺に向つた。雨煙にけむる金華山を對岸遙か東方に見て、綠も鮮かな堤を下ると、そこに寺がある。臨濟宗妙心寺派神護山といひ、明應二年瑞龍寺悟溪國師の門下、獨秀乾才(法智普光禪師)の開山で美濃國守護、土岐氏、守護代齋藤氏の興亡を經て永祿十年、織田信長が此地に居を定むるや、その菩提所として保護を加へられた。天正十年六月二日本能寺に歿した後、側室小倉氏(なべ女)が當寺を信長、信忠の位牌所とした。寺の一隅に信長父子の廟あり中に靈牌を納め、廟側の小塚に立てられた墓碑は高さ約六尺、面には

總見院殿　天正十年六月二日贈一品大相國泰岩大居士覺靈
大雲院殿　天正十年六月二日三品羽林高岩大禪定門神儀

と刻されてある。この廟所を拜した後、本堂に展覽された古文書、書畫をみる。一世獨秀乾才、二世仁岫宗壽、三世快川紹喜、四世柏堂景森等本山代々の頂相、筆蹟の外に長井隼人宛の武田信玄書狀、永祿十年九月當寺宛の織田信長禁制、織田信雄宛の信長書狀、側室おなべの書狀二卷或ひは信忠信孝の書狀あり、殊に半切の信長筆蹟なる「雪月花」は右大臣信名の署長があつて「天下布武」の朱印が認められる興味あるものであつた。其他、非情成佛繪圖

二卷、岐阜亂圖一卷、古文書一卷、寺傳に慈覺大師作といふ藤原佛一軀など近世初頭の葛藤を物語る數々の資料に思はず二時間近くを費し、時の速きを惜みつゝ辭去、繁華街の一食堂にて中食、小憩の後瑞龍寺山麓なる金寶山瑞龍寺に向ふ。

瑞龍寺は應仁元年齋藤妙椿の開基にかゝるものであるが、爾來屢々兵燹にかゝり頻度の改築があつて現存のものは一昨年新築の木の香も高い建物であつた。見學目錄のうち主なるものを列擧すると、

一、瑞龍寺殿(土岐成頼)畫像、絹本東陽和尚の賛あり、明應八年己未孟夏日とある。
一、信長禁制、永祿十一年八月、天下布武の印あり。
一、信忠下知狀、天正八年九月二十八日、瑞龍寺宛
一、瑞龍寺古圖、安永五年十一月寫(裏に瑞龍寺堺圖、慶長五年二月二十二日、將監以下の花押有り)
一、瑞龍寺山繪圖、寶永三年八月二十五日
一、土岐氏系圖一卷(新寫、奥書なし)

時間切迫の爲、忽ゝ寺を辭して停車場に向ふ。途中車をとめて圓德寺織田塚に古戰場の跡を偲んだ。卽ち天文十六年九月、信長の伯父犬山城主織田信康、齋藤道三と此の地に戰つて敗れ信康以下士卒討死した。その塚上に安永五年金龍上人が碑をたてたものである。

午後二時三十七分岐阜發の列車で高山線に入り美濃太田にて越美南線に乘換へ一路美濃の北境を目指して進む。今朝からの雨も小降になり、低く垂れ罩めた雨雲も次第に切れてゆく。北濃驛にて下車しこゝより省營バスにて六時半過ぎ薄暮の山道を牧戸へと出發した。運轉手の說明する白城線の景勝も次第に闇の黑きに閉されて指ざすべくもない。上保川の水流盡くる所、蛭ヶ野の分水嶺を越え、新たに北流する庄川に沿つて、下り坂になつた飛驒路へと入る。牧戸へ着いたのは八時過ぎ、高鷲屋、寺安屋に分宿して憩ぎ當夜、宿の女中を賴んで庄川の民謠を聞き興を添へた。

五月十九日　五時起床、霧の樣な白雲は既に彼方の山腹に退き仰ぐ高原の天空は澄み渡つてゐる。午前六時、一行三十二名がタクシー四臺に分乘して牧戸を立つ。下

瀧にかゝると道路に面して急向斜の藁葺屋根をもつ合掌造りの民家が見え出してくる。この部落では若山作右衞門氏宅が代表的のものだといふ。行手の對岸には稍〻開いた土地が見え數戸の合掌造りを望見して村落の形を示してゐる。岩瀨鄕といふ。人家から少し離れた所に鎭守の社があり、原始的な鳥居のあるのが唯一の標識で簡素な社屋は一見神威の衰退に氣づくのであるがその反面眞宗のこの地に强い勢力をもつ事をも思ひ併せて心惹かれた。福島まで車をすゝめてくると昨日の雨で土砂崩壞し交通遮斷の有樣に止むなく徒步となり、人夫の復舊工事に急ぐ間をくゞりぬけて御母衣へと急ぎ、一同御母衣の遠山家へ着き揃つたのが八時前後、案內を乞うて同家を見學する。家の往來に面した上手の座敷は八疊の佛間である。板敷に莫蓙を敷くにすぎないが室の隅には小さな衝立樣のものに多數の珠數が掛けられてあり細長い板間をへだてゝ佛壇がある。佛壇は間口約二間あり、內部の善美を盡したること、およそ日常生活とはかけはなれたものがあつた。この室の奧は襖をへだてゝ床の間のある客室になつてをり、下手に隣接しては寢室がつらなり、床は板張りで寢床のある所のみ莫蓙がしいてある。之に隣つては五尺四方位な大きさの爐を設けた一家團欒の間があり、天井からは爐上に大きな釣あまがぶらさげられ而もそれが煤の爲コルタールをぬつた樣に黑光りして異樣なる光景である。室の一隅が茶の間の如くしつらへられ小形のクドに九十年來使用してゐるといふ水瓶が二つかゝつてゐる。天井は梁の間に細い丸木を多數繩で編んだ簾垂樣のものを渡してあるにすぎず、ために階上を透してみる事が出來る。この室の下手が卽ち廊下となり細いとほり庭をへだてゝ馬屋があり、又廊下より梯にて階上に通じ四階まで達し得る。各階殆ど前述の如く無數の細丸木を繩で編んだ床で冬期馬の飼料に馬草を貯藏するといふ。四階には合掌十二組あり之を筋違四本にて補强工作をほどこし長い棧を以て双方からの合掌を支へてゐるが、斯かる補强策はこの家のみの特長だといふ事である。家の出入口の橫手には長い厚い栗の板を左右兩端の穴に緒を通して軒先から釣つてある。食事の際には之を

たゝいて山野で働く家族に合圖をするのだと聞いては、古の人呼び丘の事も思ひ出された。炊事場は家の左手後方に別に突出して作られ山からくる流を導き入れた廣い土間である。この家の後方少し離れて水車小屋があり礎礎の構造を見ることが出來た。細長い杵の樣な角材の一端に近く刳られた凹みがあり、そこへ水が滿ちて重くなる毎に下垂し、爲に水を覆すと原位置に戻る時、他端で臼をつく仕組みである。小屋の中にあつた履が又面白く藁で編んだスリツパ樣のものに更に鼻緒がつけてあり、彼の足半(アシナカ)と稱せられる履物のことも連想させられた。大體見學を終つた後正午までの時間をもつて有志の人々は更に北の平瀨部落の見學に出かけた。途中對岸の山裾に三軒ならぶ長瀨は村落形成の原型を示すものと思はれて興味深く觀察した　恰も日曜で平瀨附近は村の人出多く裁着(タツケ)姿も數多く見られた。

十二時前遠山家にて中食をとり、見學に尙心殘り多きことを想ひつゝ午後一時御母衣を離れた。

多少時間に餘裕を生じた爲途中中野の昭蓮寺へ立ちより鐘樓の鐘を見學する。飛州安國寺の刻銘及建武元年三月十二日の陽鑄銘が讀まれ、陰陽二種の銘につき問題を含むと思はれるが、全體の形、撞座の蓮花等よりして鎌倉末のものなる事は疑ひないものである、かくて牧戸へついたのが二時頃、小憩の後省營バスにて歸途につく。猿飛びの勝景と共に紅葉の頃は又絕好の眺めあるといふ瀧ケ野を過ぎ、次第につま先上りになると分水嶺をなす蛭ケ野高原に達する。海拔約八百米、面積三百五十步に及ぶ高原だと云はれる。そこに下車して鉋を用ひず手斧(テヲナ)のみで作れる家屋を見少し進んで又釜ノ洞口附近に車を降り斷崖にかゝる駒ケ瀧(大瀧)の勝景を訪ね、一路歸途を急ぎ午後四時頃北濃驛に到り、同二十七分北濃驛發七時五十八分岐阜驛着、同八時二十五分同驛發、同十一時三十六分一同京都に歸着し、恙なくこの旅程を終つた。一同旅行の收獲多きを喜ぶと共に、先輩小泉氏の御配慮に對し深謝するものである。

(土井、前橋、村山)

會報

○會員動靜

入會

愛媛縣道後湯之町九五三村上常太郎方　入江　春男氏
京都市東山區泉涌寺東林町二　岡田芳三郎氏
京都市左京區聖護院西町七首藤方　池田　正孝氏
京都市伏見區深草大龜谷內膳町二四　藤岡謙二郎氏
京都市左京區修學院山添町一八谷川方　澄田　正一氏
京都市左京區吉田神樂岡町二四朝日方　小野　義彥氏
京都市下京區堺町通松原下ル　前川貞次郎氏
京都市左京區吉田中大路町三四近藤方　村田　實氏
京都市上京區紫竹芝本町二ノ五七神田方　松山　國義氏
京都市左京區田中門前町四二土井方　內海　十郎氏
京都市中京區御池通堀川東入伊藤方　東鄉　松郎氏
（以上鹽見高年氏紹介）
Boston, Mass. U. S. A.　Museum of Fine Arts
（梅原末治氏紹介）
大阪市東區北濱五丁目　砂　元吉氏
（岡島誠太郎氏紹介）

轉居

京都市左京區下鴨北園町一二八ノ一　田中　達男氏
兵庫縣西宮市外甲東村關西學院大學豫科內　辻村　正吾氏
水戸市常盤町五九二五黑澤誠太郎方　高井悌三郎氏
京都市左京區田中飛鳥井町九黑川時雄方　藤枝　晃氏
京都市左京區淨土寺西田町四七清水方　小澤　吉見氏
上海法租界祁齊路三百二十號上海自然科學研究所　新城　新藏氏
姬路市五郎右衞門邸七五　小玉　興一氏
京都市左京區田中高原町二五藤田方　水野恭一郎氏
京都府何鹿郡綾部町若松町梅原繁治方　澤田德兵衞氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄

	著者
井野邊茂雄著　維新前史の研究	
京城帝大文學會編　東方文化史叢考	京城帝大法文學部
岩崎文庫和漢書目錄	東洋文庫
史學雜誌　四六ノ四、五、六	史學會
歷史地理　六五ノ四、五、六	日本歷史地理學會
史潮　五ノ一	大塚史學會
史淵　一〇	九大史學會
史學　一四ノ一	三田史學會
史學研究　六ノ三	廣島史學研究會
人類學雜誌　五〇ノ三、四、五、五〇卷第一、第三附錄	東京人類學會

考古學雜誌 二五ノ三、四、五	考古學會
文化 二ノ三、四、五	東北帝大文科會
史迹と美術 五三、五四、五五	史迹美術同攷會
鄉土研究 信濃 四ノ三、四、五	信濃鄉土研究會
社會經濟史學 四ノ一二、五ノ一、二	社會經濟史學會
龍谷史壇 一五	龍谷大學史學會
青丘學叢 一八	青丘學會
國史學 二三	國史學會
經濟論叢 四〇ノ四、四〇ノ五	京都帝大經濟學會
國學院雜誌 四一ノ四、五	國學院大學
社會學徒 九ノ四、五	社會學徒社
皇學 三ノ一	神宮皇學館館友會
商業と經濟 一五ノ二	長崎高商研究館
日本文化 二ノ三	天理圖書館
日本大學文學科研究年報 第一輯別刷	日本大學文學科
宗教研究 一〇	宗教研究會
浙江圖書館館報四ノ一、二	浙江省立圖書館
佛教美術 二〇	佛教美術社
明治大學史學會々報 二	明治大學史學會
京城帝大史學會報 七	京城帝大史學會